

Title	ヴィーラントのメルヒエン論
Sub Title	Wielands Märchen
Author	太田, 達也(Ota, Tatsuya)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1993
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.64, (1993. 12) ,p.126(85)- 140(71)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00640001-0140

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ヴィーランドのメルヒェン論

太田達也

0. 序

ドイツ文学における18世紀後半から19世紀初頭にかけての時期は、さまざまな思潮が同時代的に並行して現れたのみならず、実作面においてもこれまでにない多岐に渡る試みが展開されたという意味において、実に「多様」な時代であったと形容することが出来ようが、これを当時の詩学の状況という観点から考察するならば、ギリシア・ローマ以来の伝統的詩学に捉われていた詩人たちが、ここに来てようやく「詩作するもの」としての自覚に目覚め、自ら創造する「詩」(Poesie)に、従来その基盤とされてきた「自然模倣」といったものとは違う積極的な意味づけを行おうとし始めた、そのさまざまな形での試みの現れであったと捉えることも可能であろう。実際、ロマン、メルヒェン、ノヴェレといった形式が文学の一ジャンルとして確立していったのがちょうどこの時代であったのも決して偶然ではなく、これは詩的創造意義の価値転換という当時の時代現象と密接に関わるものであったのである。こうした時代にあって、同時代のあらゆる思潮に関わりながらもどの潮流に属することもなく、またあらゆるジャンルに渡ってさまざまな試行錯誤を繰り返すことでこの時代の新たな文学ジャンルの確立に貢献することとなったヴィーランド(Christoph Martin Wieland, 1733-1813)という詩人は、詩学の歴史という観点から見ても非常に興味深い人物である。彼の極めて多岐に渡る一連の創作活動は、自然模倣論の脱却に始まって「詩」それ自体に絶対的価値を認める近代の文学への橋を渡したというにとどまらず、結果として、叙事詩に代わるものと

してのロマン、近代風小説詩、フランス妖精物語に代わる創作メルヒェン、ノヴェレ、ジグシュピール等、個々のジャンルにおいて、ドイツにおけるその最初の母体を築くことにも繋がった。勿論これらの功績の大部分をただヴィーラントという人物一人に帰することは出来る筈もないが、しかし後の時代、特に初期ロマン主義のポエジー論への展開とその繋がりに眼を向けるならば、ヴィーラントの果たした歴史的役割は、決して評価し過ぎることのないほど大きなものであったと言える。ヴィーラントの文学をこのような歴史的見地に立った上でジャンル別に考察することで、彼が詩学の歴史において占める位置を明らかにしようとするのが筆者の研究課題であるが、¹⁾ 本論は、特にメルヒェンに関する彼の発言を、(1)神話との関わりと起源の問題、(2)「不可思議なもの」について、(3)メルヒェンの規範としての「夢」、の3つの観点から整理しながら、ヴィーラントのメルヒェン論の歴史的立場づけを試みようとするものである。

ヴィーラントのメルヒェン論について論じるには、まず最初に、彼の言う「メルヒェン」の概念の不明確性について確認しておく必要があると思われるので、第一章ではこの問題を取り上げて、本論の出発点としたい。

1. ヴィーラントにおける「メルヒェン」

ヴィーラントが「メルヒェン」(Märchen)という語を用いる時、その意味するところは必ずしも常に同一ではない。それはしばしば、Erzählungという語と混用され、両者の間を明確に区分する境界線すら存在しないように思われる。

例えばヴィーラント自身の編纂によるメルヒェン集『ジンニスタン』(Dschninnistan oder auserlesene Feen- und Geistermärchen, 1786-1789)の出版予告の中で彼は、「魔性物語、妖精物語、魔法物語」(Geister-, Feen- und Zaubergeschichten)と「メルヒェン」とは「同じものを意味する言葉である」としているが、²⁾ その一方で1781年の「トイチェ・メルクール」誌上に掲載された論文『魔術や霊現象を信じる人間の性分について』

(Über den Hang des Menschen an Magie und Geistererscheinungen zu glauben, 1781) においては、「神々や霊の出現、魔法や妖精の世界」(Götter- und Geistererscheinungen, Zaubereien und Feereien)³⁾を描き出す種類の詩文学に対して Erzählung という語を充てており、ヴィーラント自身、Märchen と Erzählung というこの二つの術語を、必ずしもはっきりと区別して用いてはいないのである。⁴⁾ こうした概念規定の不明確さは、作品の標題づけにも表れている。フランス妖精物語からの翻訳或いは自由な翻案を中心に編まれた『ジンニスタン』には、ヴィーラント自身の創作によるメルヒェンも二つ含まれているが、この二つのメルヒェン、即ち『賢者の石』(Der Stein der Weisen) 及び『火の妖精と彫像』(Die Salamandrin und die Bildsäule) には何れも Märchen ではなく Eine Erzählung という標題が与えられている。これに対し、「ドイツで最初の創作メルヒェン」⁵⁾とも見做される『ビリビンカー王子の物語』(Geschichte des Prinzen Biribinker, 1764) には、実は Märchen という標題は与えられていない。

一方、ヴィーラントが自ら Märchen というタイトルを与えている作品としては、『千夜一夜物語』に材を得た韻文物語『冬物語』(Ein Wintermärchen, 1776) 及び『夏物語』(Das Sommermärchen oder des Maultiers Zaum, 1777)、枠物語形式の閑話集『ローゼンハインの六日物語』(Das Hexameron von Rosenhain, 1805) 中に収められた 3 編の Märchen などがあるが、これらの作品と先程の Märchen と呼ばれていない作品との間には、特に本質的な差異は認められないのである。⁶⁾

ヴィーラントの用いるこうした述語の概念規定の難しさは、上のような Erzählung や Märchen といった詩のジャンルの問題を越えて、更には神話、宗教、魔術、霊現象一般の全てを包括的に一つのものとして捉えようとする彼独自の世界観の問題にまで発展する。彼はしばしば「メルヒェン」と「神話」とを同一線上において論じて、両者の間の明確な概念的区別を行わない。この傾向は、上述の論文『魔術や霊現象を信じる人間の性分について』においてとりわけ顕著に認められる。この論文において彼は、当時ドイツで流行していた神秘的なもの、魔術めいたものに対する人々の

興味を、人間の「本能に根ざす不可思議なものへの愛着」⁷⁾に基づくものであるとし、そうした生まれながらの人間の本性から、神話や宗教、魔術やメルヒェン等、不可思議なもの一切の起源を歴史的に説明しようと試みているが、そこでの彼の用語の使用法は極めて恣意的であって、「メルヒェン」「神話」「宗教」「魔術」「霊現象」といった概念がしばしば互いに交錯している。⁸⁾

次章ではまずこの問題、即ち神話やメルヒェンの起源に関する彼の解釈について、上述の論文等を取り上げながら考察してみることにしたい。

2. 神話とメルヒェンの起源

「民族の歴史は、口を利く動物や神の顕現で始まる。神々や人間の姿をした半神、霊や妖精、魔法を操る男女、ケンタウロスやキュクロプス、巨人や小人、これらが諸国民の太古の時代においてその最初の役割を演じているのだ。どの民族もそれぞれ固有の神話、即ち太古のメルヒェンの蓄積を有しているものだが、これはそれぞれ独自の観念形態や生活形態、個々の歴史や宗教、風土、慣習、社会体制と密接に関わりあうために、時代を経ても決して拭い去られることがない。

寓話が最初の教育法であり、寓意が最も古い哲学のペールであり、そしてメルヒェンが太古のこの上なく偉大な詩人たちの素材であった。カムチャッカ人もギリシア人も、ペルシア人もアイスランド人も、この点に関しては皆同じである。最も自然状態に近い民族の文学はメルヒェンから始まる。そして最も洗練された民族の文学の大部分、おそらくその中でも最も心地好い、最も好まれる種類のものは、メルヒェンである。」⁹⁾

1786年に『ジンニスタン』第1巻に付せられたこの「序文」(Vorrede)の中でヴィーラントは、「神話」(Mythologie)を即ち「太古のメルヒェンの蓄積」(Vorrat uralter Märchen)であるとしながら、そこに一切の「詩」の起源を見ようとする。彼にあっては「神話」と「メルヒェン」と

は、何れも人間の持つあるひとつの性向から等しく発生したものであるという意味において、同一のものである。その人間独自の性向とは即ち、「不可思議なものに対する本能的性向」(die instinktartige Neigung zum Wunderbaren)¹⁰⁾である。

ヴィーラントによれば、人間の持つこうした不可思議なものに対する愛着は、およそ人類の歴史と同じ程の古さを持つ、つまり人間が生まれながらに備えている本能的な性分なのであり、従って科学が発達した近代であっても、不可思議なもの存在を信じたいと思う我々の「信仰心」は、人類の歴史が始まった時と同様、今でも等しく人間の心に存在する。論文『魔術や霊現象を信じる人間の性分について』には、その辺りの彼の見解が詳しく示されている。彼はそこでおおよそ次のような論を展開する。幽霊や精霊、その他もろもろの目には見えぬ不可思議な存在は、健全な哲学者のあらゆる非難やそれによってもたらされた啓蒙思想というものを全てを敵に回しても、なお弁護者を見出すであろう。最も啓蒙された人間でさえも、この種の会話や読書には喜んで興じるものだ。というのも、この種のものに対する信仰は哲学よりもずっと古く、それは人類の歴史と同時に始まったものであるからだ。こうした不可思議なものは、古来より詩人たちにとってまた最高の詩的源泉であった。故に彼らは、この人間特有の性分を実に魅惑的な方法で生育することに成功した。そのために我々は、彼ら詩人たちの手にかかるのと、騙されていると分かるほどの十分な理性を持ち併せていながらも、心地好く騙されていくくなるものなのである。ヴィーラントは更に、宗教の発生や中世における魔術の起源等についても、神話やメルヒェンの起源と同様、人間が生来持っている「不可思議なものに対する性向」に由来するものであるとしている。¹¹⁾

それでは、人間が等しく興味を抱く「不可思議なもの」から、一体どのようにして神話が発生したのか。この問題についての彼の見解は、1788年の「トイチュ・メルクール」誌上に発表された論文『信仰問題における理性の自由な使用について』(Über den freien Gebrauch der Vernunft in Glaubenssachen, 1788)の中に表れている。

『信仰問題における理性の自由に使用について』は、理神論の立場から教会改革を提案する内容のものだが、その骨子となるキリスト教史概観の部分でヴィーラントは、神話の起源を「説明出来ないものを説明しようという人間の内的衝動」に基づくものとする。¹²⁾ どの人間も内的衝動から、全て感覚によって捉えることの出来るものを、これは何か作用するものの働きである、即ち原因となるものがあるからこそ、その働きがある、と理解するものである。然るに先に述べたような不可思議なものに関しては、その現象を納得のいくように説明出来るような原因が何も知覚されないため、人間は必要に迫られて、そのような不思議を生み出す原因、少なくともかの不思議の発生に一役買っているであろうと思われる原因を、「目に見えずに作用するもの」(unsichtbare Wirkende) に求めようとする。更に人間の想像力は、こうした「目に見えぬもの」に姿を与えて、目に見えるものとした。そこから、霊や妖精、神々等が生まれたというのである。¹³⁾ これが、神話の起源についてのヴィーラントの解釈である。

ヴィーラントのメルヒェン論は、こうした彼の神話論の延長線上にある。神話と同様、メルヒェンについても彼は、人間が生来備えている本能的な内的衝動から生まれたものとして捉えて、そこに太古の「詩」の起源を見ようとする。¹⁴⁾ しかしながらヴィーラントは、メルヒェンを単なるそのような人間の本来的なところに起源を持つ「最も自然状態に近い民族の文学」として捉えているのみならず、同時にまた「最も洗練された民族の文学の大部分、おそらくその中でも最も心地好い、最も好まれる種類のもの」でもあると理解している。あらゆる「詩」の源泉として神話と同一線上において捉えられるべきものとしてだけではなく、近代文学の一ジャンルとしてもメルヒェンを積極的に評価しようとしたヴィーラントは、そこにいかなる特質を認めていたのであろうか。

3. 「不可思議なもの」(das Wunderbare) と「真なるもの」 (das Wahre) への性向

「不可思議なものへの愛着と真なるものの愛好という二つのかくも相反する傾向が、人間には同じように自然であり、同じように本質的であるとは、一見奇妙に思えることだが、しかし実際そうであることに他ならないのである。どうして、とか、なぜ、といった問題にここで立ち入るのはよそう。そうである、ということ、そしてまた、不可思議なものを扱った類のメルヒェンこそが、それが上手く語られた場合には、この二つの傾向を同時に満足させるものであるということ、そして正にこの点にこそ、メルヒェンがあらゆるタイプの聴衆や読者に与える不思議な魅力の源泉があるのだということだけで十分だ。」¹⁵⁾

人間はなにがしかの真理、即ち「真なるもの」が語られるのを好むと同時に、「不可思議なもの」について聞くこともまた好むものである、という認識が、ヴィーラントの人間論の根底には常に流れている。「真なるもの」に対する愛と同時に人間が持つ「不可思議なものに対する愛は、我々の生来の性向の中で最も普遍的なものであるばかりでなく、最も強いもの」であり、「不可思議なものに対する性向は、言ってみれば、人間の性分の最も強く、かつ最も弱い側面である」と、ヴィーラントは『ローゼンハインの六日物語』中の一登場人物に語らせている。¹⁶⁾ 我々が前章で確認したように、ヴィーラントの把握では、人間は常にこうした生まれながの不可思議のものに対する本能的興味から、幽霊や妖精、神々や魔術といったものを生み出してきた。更に哲学が興ると人間は、「自然という書」の中に神秘的な意味を感じ取り始め、こうして目に見える世界を全て「この(自然という)神秘的な書の象形文字」(Hieroglyphen dieses geheimnisvollen Buches)として捉えるようになった。¹⁷⁾ 啓蒙主義者としてのヴィーラントは本来、こうした神秘主義的世界観に基づく思考法、ヴィーラント自身の

言葉によれば、「ロマン的哲学法」(romantische Art zu philosophieren)¹⁸⁾は、一切の不可思議なものに対する性向という「人間の性分の中でも弱い側面」¹⁹⁾に由来するものとして、積極的には肯定しない立場にある。しかし彼の場合、同時にまた、我々人間は実際そういう存在なのであるということを経験した上で、これに対して「自然や一般的経験、人間に共通の悟性が提示するところの絶対的原理」をもって自らをしっかりと守る必要性のあることを訴え、そうした「弱さ」に対する理性的自己防衛を促すことも忘れない。²⁰⁾啓蒙主義の代弁者であると同時に詩人でもあるヴィーラントのこうしたアンビヴァレントな立場は結局、人間の持つ「不可思議なもの」に対する性向を「人間の持つ弱い側面」として否定するばかりか、逆にこれを最も豊かな詩的源泉として積極的に肯定し、読者を啓蒙する際の有効な手段として利用しようとするのである。

「このことは何度繰り返しても言い過ぎることはないだろう。つまり、人間を誤謬や悪癖から治してやりたいと思う者は、薬に何か快い汁液やアルコールを混ぜて飲みやすくしてやる術を心得ていなければならない、ということだ。人間を教え、改心させるには、自分はただ彼らを楽しませたいだけだというふうに見せることほど、確かな方法はない。」²¹⁾

この言葉から読み取れる限りで言えば、確かにヴィーラントのメルヒェン論は、「教えかつ楽しませる」(delectare et prodesse)という伝統的詩学の延長線上に立った、飽くまでも啓蒙主義の域を出るものではない。²²⁾その意味で彼のメルヒェンは、詩的ファンタジーの自由な飛翔を認めたゲーテやロマン派の人々のそれとは一線を画している。しかしながら、ヴィーラントの作品中において果たす「不可思議なもの」の役割について検討してみるならば、明らかにそれは、18世紀前半までの伝統に縛られた性格、つまり「模倣」といった自己外部の目的のためではなく、象徴的役割を担うものとしての「詩」という、自律的価値を持つものとしての性格を負うものとなっている。例えば、多分にメルヒェンの要素を帯びた叙事詩『オペ

ロン』(Oberon, 1780)における不可思議なものが表しているものは、伝統的な意味での客観的な真実でも、純粋に美学的な意味での真実でもなく、より高次なものへの反省が同時に示された「理想的真実」であろう。²³⁾ その意味で、「不可思議なもの」はヴィーラント文学の「単なる一構成要素から、彼の詩そのもの」²⁴⁾ となっているのである。

4. メルヒェンの規範としての「夢」

『ローゼンハインの六日物語』は、ボカッチョの『デカメロン』を模して書かれた枠物語形式の閑話集である。偶然にローゼンハインの地に集まった男女が、各々一話ずつ、計6編の小話を語り合うという設定だが、その合間に差し插まれた対話には、しばしばヴィーラント自身のメルヒェン論が見え隠れしており、その意味で非常に興味深い。

登場人物の一人、哲学者のM氏は、メルヒェンを次のような言葉で明確に定義する。

「メルヒェンとは、ファンタジーの国、夢の世界、妖精の国の出来事であり、これが現実の人間や出来事と織り合わされ、中ほどでは敵方の反対勢力や味方側の見えない助力等あらゆる種類の困難や紆余曲折を経た後、ついには意外な結末に導かれるものです。メルヒェンがこのような種類のものであればあるほど、そしてその成り行きが生き活きとしていて、魔法じみていて、それ自身解き難くもつれ合っていて、謎めいていて、しかしそれでいて目覚めの夢に秘められた意味をわずかでも予感させるものを持っているようなものであればあるほど、また、その中で奇妙にも、作用と原因、目的と手段とが互に行きつくように思われるものであればあるほど、メルヒェンは、少なくとも私の目には、完璧なものとして映るのです。」²⁵⁾

この言葉を語るM氏は、「最も新しい哲学の偉大なる信奉者」(ein großer

Bewunderer der neuesten Philosophie)²⁶⁾と形容される人物である。この作品が書かれた1804年頃は、言うまでもなく初期ロマン主義者たちによる新しい文学が唱えられていた時期であり、ヴィーラントがここで彼独自のイロニーをもって「最も新しい哲学の偉大なる信奉者」とM氏を描写する時、そこにはロマン主義に対するある種の客観的な距離が置かれていることは明白である。²⁷⁾ このM氏は更に、「私がたった今お話したメルヒェンは自分の夢を題材にしたものです」と告白する女性の発言を支持する形で、メルヒェン詩人は「ある意味で夢を規範とする必要がある」と力説する。というのも、「夢が描き出す現象がどんなに理に反し、理解し難く、またあり得ないものであろうとも、当の夢見る人にとってはそれは自然で、納得のいく、信じられるものと思われる」からである。従って「詩人は彼なりのやり方で、夢を模倣する」ものだと述べる。²⁸⁾

夢をメルヒェンの規範にするというM氏の主張は、メルヒェンにおけるファンタジーの自由な飛翔を認めて「不可思議なもの」の哲学的正当化を止揚するというよりはむしろ、夢を規範にすることで、「不可思議なもの」に満ち溢れたメルヒェンに逆に一定の論理的一貫性を付与しようという作者自身の見解と見るべきであろう。「つい最近のある明け方に自分自身が見た夢」から物語を創作したというアマンダは、自分の物語について次のように語る。

「夢の中では確かに、始めの部分と終わりの部分とは、私が今語った話ほど完全には、日常的な意味で辻褄が合っていないでしょう。しかしこの物語の中の妖精的な部分は全て、私が自分の夢から創作したもので、他の部分はただそれに、妖精界以外でも起こり得るようなものの形を与えるために付け足しただけです。人間の日常の出来事の中にも何か高次な力が働きかけるものだということは、自明なこととして受入れられておりますものね。」²⁹⁾

「不可思議なもの」を「自然な」「日常なこと」と巧みに織り合わせて、

夢に何らかの現実性を付与すること、これがアマンダの唱えるメルヒェン論であり、同じことをヴィーラント自身も、『ジンニスタン』序文において述べている。³⁰⁾ ヴィーラントの作品に描かれた「不可思議なもの」は従って、読者の想像力を楽しませる自由なものであっても、常にそれらは現実世界との結びつきを失ってはいない。不可思議なものを真理の中に織り混ぜつつ語り進めながら、夢を言わば合理化の手段として利用するという手法は、ヴィーラントが『ドン・シルヴィオの冒険』(Der Sieg der Natur über die Schwärmerei oder die Abenteuer des Don Sylvio von Rosalva. Eine Geschichte worin alles Wunderbare natürlich zugeht. 1764) 以来好んで用いてきたものである。彼は詩人として「不可思議なもの」を愛好しながら、同時に啓蒙主義者としての自分の責務をも忘れない。夢をメルヒェンの規範とすることで不可思議のものにも一種の合理性を与えようとするM氏の発言には、やはりヴィーラント自身のこうしたアンビヴァレントな二面性、即ち詩人であると同時に啓蒙主義者たらんとする彼の一貫した創作姿勢が窺えるのである。

5. ロマン主義の攻撃とその受容

初期ロマン主義の人々、特にシュレーゲル兄弟のヴィーラントに対する評価は、当初極めて好意的なものであったが、1789年を境としてそれが完全に否定的な態度へと一変する。ロマン主義者たちの攻撃の矛先となったのはもっぱら、ヴィーラントの作品における「独創性」(Originalität)の欠如という問題であった。A. W. シュレーゲルは、『文学と芸術に関する講義』(Vorlesungen über schöne Literatur und Kunst, 1801-1804)、いわゆる「ベルリン講義」の中で、ヴィーラントのこの問題について次のように述べている。

「(...) ヴィーラントは外国文学を規範とした模倣という点で更に道を誤った。彼が全てを自らの手で生み出すような一個の独創的人物である

などと言った者は、熱狂的な彼の崇拜者の中にさえこれまで一人もいないだろう。彼がセルヴァンテス、ルキアノスや他の詩人たちから、ほとんど盗作と言ってもよいような模倣を行っていることは明々白々である。人々が、彼の哲学、彼のモラルという名のもとに賞賛しているところのもの、また、彼こそが優美の社会に智をもたらし、彼の書は単なる娯楽の尽きぬ泉であるばかりか、教訓にも溢れていると人々に言わしめているところのもの、これらを彼はしかし主にごどこから創造したのか。言うまでもなくそれは、フランスの百科全書派の人々からである。(…)³¹⁾

ロマン主義者たちの非難はこうして、ヴィーラント文学の「独創性」のみならず「ファンタジー」そのものの欠如、更には「独自の神話を創造することの不能性」にまで向けられ、彼の作品を「非文学」(Unpoesie)であるとして断罪する。³²⁾

しかしながら、これに対するヴィーラントの立場は明確であった。彼は作品の素材を、外国文学を含めた他の作品に求める自らの態度について、その正当性を次のように主張する。

「題材の創案者 (Erfinder eines Sujets) は、時として単なる発見者 (Finder) に過ぎない。真の創案者とは、どこであれ発見した題材から、まるで自然とそこから生まれたような美しく完全な一つの全体を作り出す術を心得ている者のことである。」³³⁾

ヴィーラントは、素材の内容はともかく、むしろその翻案作業 (Bearbeiten) に、各々の詩人独自の創造の意義を認めようとする。「シェイクスピアもミルトンも、その素材はほとんど全て借り物ではなかったか？ホメロスはその素材をどこから取ってきただろうか？」³⁴⁾ 実際ヴィーラントの作品で、その素材やモデルとなった出典作品の明らかでないようなものはほとんどないと言ってよい。『ジニニスタン』中、ヴィーラント自らが自分の「オリジナル」の作品と呼んでいる『賢者の石』及び『火の妖精と彫像』

にしても、その題材がルキアノスやフランスの妖精物語から来ていることは、当時の教養ある読者ならばすぐに察知されたであろう。つまりヴィーラントの言う「オリジナル」の概念は、ロマン主義者たちの解釈とはそもそも異なり、既にあるものを素材とするにせよ、そこに現代との、延いては現実の世界との結びつきを作ることによって、古いメルヒェンや古い神話に代わる新たな「詩」を創造するという点にある。太古の神話やメルヒェンは、それ自体豊かな詩の源泉であり、人間の最も自然な想像力の宝庫であるけれども、ヴィーラントの立場は、その始源の状態に立ち還ろうとするというよりはむしろ、そこに新たな「詩」の基盤となるものを求めつつ、それを近代に相応しい形で蘇生させようという、近代文学の新たなあり方を指向するものである。彼が「お伽噺」(Ammenmärchen)について、「口承によって語り継がれればよいが、印刷される必要はない」³⁵⁾と云って、文学の一ジャンルとしての民間メルヒェンをほとんど評価しないのも、彼が古い神話、古いメルヒェンを、飽くまでも新たな「詩」の母体として捉え、彼自身の興味は常に近代に見合った創作メルヒェンの創造という方向に向けられていることの現れである。起源の問題に端を発したヘルダーの神話・メルヒェン解釈が、グリム兄弟の民族歌謡の発見と収集を導いたとするならば、ヴィーラントのメルヒェン論は、同じく神話の起源の問題をその出発点としながらも、不可思議なものと啓蒙主義の融合とその哲学的合理化という方法を通じて、古き時代の神話やメルヒェンに代わる新たな文学の可能性の方向を示唆し、これが後の「新たな神話」(Fr. シュレーゲル)やロマン主義的な意味での「メルヒェン」(ノヴァーリス)を導くことになったと言える。ロマン主義者たちの、しばしばヴィーラント個人の問題にまで関わる激しい攻撃や非難は、両者の間の本質的な共通点に着目するならば、ある意味ではゼングレの言うように「一種の息子の憎悪」(eine Art von Sohneshaß)³⁶⁾に過ぎない。ロマン主義者たちがしかし実際に行ったことと言えば、ヴィーラントにあってはまだ理論化されていない個々の概念を自らのものとして吸収し、それらを一つの体系に纏めあげて自分たちの理論を構築するという作業であって、ロマン主義詩学の

中心を形づくる「新たな神話」「メルヒェン」「象徴」「象形文字」といった概念にしても、そのヒントとなる要素は既にヴィーラントの文学に内在していたものなのである。そうした観点から我々は今後、ロマン主義者たちがこれらの概念をどのように再解釈し、自己のものとしていったのか、その跡づけを行っていく必要があるだろう。

註

- 1) 叙事詩のジャンルにおける研究は、太田達也：「様式の文学」としての叙事詩。一詩学の歴史における Chr. M. ヴィーラントの詩的創造の意義—（慶応義塾大学独文学研究室「研究年報」第10号，1993年，48-76頁。）を参照。
- 2) Christoph Martin Wieland: Gesammelte Schriften, 1. Abteilung: Werke. Hg. v. d. Deutschen Kommission der Preußischen Akademie der Wissenschaften (=Akademie-Ausgabe), Berlin 1909ff., Bd. 18, S. 3.
- 3) Christoph Martin Wieland: Sämtliche Werke. Hg. v. d. Hamburger Stiftung zur Förderung von Wissenschaft und Kultur (=Hamburger-Reprintausgabe), Hamburg 1984, Bd. 24, S. 75.
- 4) Vgl. Hermann Müller-Solger: Der Dichtertraum. Studien zur Entwicklung der dichterischen Phantasie im Werk Christoph Martin Wielands. Göttingen 1970, S. 101.
- 5) Wilfried Rudolph: Die Entzauberung. Zum Märchenschaffen des späten Wieland. In: Das Spätwerk Christoph Martin Wielands und seine Bedeutung für die deutsche Aufklärung. Hg. v. Thomas Höhle, Halle (Saale) 1988, S. 151-160.
- 6) Vgl. Müller-Solger: a. a. O., S. 101. Vgl. auch Friedrich Sengle: Wieland. Stuttgart 1949, S.406.
- 7) Hamburger-Reprintausgabe, Bd. 24, S. 74.
- 8) Vgl. Hans-Joachim Kertscher: Bemerkungen zum Mythosverständnis des späten Wieland. In: Das Spätwerk Christoph Martin Wielands und seine Bedeutung für die deutsche Aufklärung. Hg. v. Thomas Höhle, Halle (Saale) 1988, S. 54-68.
- 9) Akademie-Ausgabe, Bd. 18, S. 6.
- 10) Hamburger-Reprintausgabe, Bd. 24, S. 74.
- 11) Hamburger-Reprintausgabe, Bd. 24, S. 73ff.
- 12) Vgl. Kertscher: a. a. O., S. 59.

- 13) Hamburger-Reprintausgabe, Bd. 29, S. 29.
- 14) ヴォーラントはこの点において、ヘルダーの神話観及びメルヒェン論からの影響を多分に受けている。Vgl. Fritz Strich: Die Mythologie in der deutschen Literatur von Klopstock bis Wagner. Bd. 1, Tübingen 1970, S. 183ff.
- 15) Akademie-Ausgabe, Bd. 18, S. 6.
- 16) Hamburger-Reprintausgabe, Bd. 38, S. 14.
- 17) Hamburger-Reprintausgabe, Bd. 29, S. 31.
- 18) Hamburger-Reprintausgabe, Bd. 24, S. 76.
- 19) Hamburger-Reprintausgabe, Bd. 24, S. 92.
- 20) Ebd.
- 21) Akademie-Ausgabe, Bd. 18, S. 7.
- 22) Vgl. Paul-Wolfgang Wühl: Das deutsche Kunstmärchen. Heidelberg 1984, S. 43-54.
- 23) 太田：前掲論文，59頁以下参照。
- 24) Rudolph: a. a. O., S. 152.
- 25) Hamburger-Reprintausgabe, Bd. 38, S. 169.
- 26) Hamburger-Reprintausgabe, Bd. 38, S. 15.
- 27) Vgl. Müller-Solger: a. a. O., S. 114f.
- 28) Hamburger-Reprintausgabe, Bd. 38, S. 170.
- 29) Hamburger-Reprintausgabe, Bd. 38, S. 168.
- 30) Akademie-Ausgabe, Bd. 18, S. 6.
- 31) August Wilhelm Schlegel: Vorlesungen über schöne Litteratur und Kunst, 3. Teil. Heilbronn 1884. [Deutsche Literaturdenkmale des 18. und 19. Jahrhunderts, No.19.] S. 80.
- 32) Vgl. Klaus Oettinger: Phantasie und Erfahrung. Studien zur Erzählpoetik Christoph Martin Wielands. München 1970, S. 120ff.
- 33) Akademie-Ausgabe, Bd. 18, S. 12.
- 34) Literarische Zustände und Zeitgenossen in Schilderungen aus C. A. Böttigers handschriftlichem Nachlasse. Hg. v. C. W. Böttiger, Leipzig 1838, Bd. 1, S. 254.
- 35) Akademie-Ausgabe, Bd. 18, S. 9.
- 36) Sengle; a. a. O., S. 341.